あれ？あはは。転生しちゃった☆

露真乃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あれ？あはは。転生しちゃった☆

【Ｎコード】
Ｎ４９８７Ｖ

【作者名】
露真乃

【あらすじ】
転生するだけ～～。ほんとはドイツとかのお手伝いにしたかったけどありきたりすぎたのでイギリスですっ☆あらすじ見ただけじゃわかんないよねっ☆だからあらすじ見ちゃった人は本編見たほうが得ですよ～～↑

え？ちょっと待って！このおっさん誰！？（前書き）

初めましてっ！の人も違う人もこれからよろしくっ☆

え？ちょっと待って！このおっさん誰！？

ハロー☆僕はひろとっていうんだ☆男子で平仮名とかかっこ悪いよね☆
でね！なぜか最近皆から「ヘタレ」って言われるんだ♪なんでだろぉ☆
あ～～。かわいいにゃんこ～～？うわっ！かっちゃかないで！！痛い！この猫凶暴！！
うわっ！猫が噛んできたよ！！あれ？意識がとおくなってきた…？
あはは～～僕死んだりして・・・☆

★

う？ここどこ～～？あ！死んだのか！あの猫なんだったんだろうな！毒猫？？
・・・てかマジで死んでる！？え～～？？まだ僕中一だよ！？え～～？
・…まぁいいかっ☆

「今から君は転生します。」

うわぁ！びっくりしたぁ！！誰だよこのおっさん・・・。

「おっさんとはなんだよぉ！！…殺すぞっ☆」
「うわぁぁぁぁ！！ごめんなさいごめんなさい！！」

何この人。めっちゃ怖い！！逃げよ！！

「逃げるな！話を聞け！！」

「いやです☆」
「…」

うん。逃げよっ☆

「まぁいい…。いまから君には転生してもらう。」

転生って何？僕まだ食べたことないなぁ☆

「ヘタリアという漫画を知ってるかね。」
「友達に熱く語られてあげくの果てに漫画を貸し付けてきたので知ってます☆」
「今からその世界へいってもらう。」

うわ☆このおっさん大丈夫か？
・・・あ～～！！わかった！これ夢なんだ！！きっと猫に噛まれて気絶しただけだよ！！

「でわ行くのだ～～」
「え～～…これ夢でしょ？早くさめてよ～～。怖いし！！」
「夢じゃないし！！良いからはよいけ！！ユキ・カークランドよ！！」
「えぇ！？待って！誰それ！！」
「え？お前の名前だけど…。」
「カークランドってヘタリアの、イギリスの人名だよね！？」
「あぁ。言い忘れてた。お前の名は今からユキ・カークランド。ヘタリアの世界でイギリスのお手伝いさんだ！」
「お手伝いさんならさ！名前一緒にすることないじゃん！！」
「え？だって考えるのめんどいしw」

ひどいっ！！行きたくないし！！！

「いやっ！僕絶対に行かない！」

「いいから行けや！」

「あ～～～～！？」

そうして僕は転生することになった。強制的にね☆

え？ちょっと待って！このおっさん誰！？（後書き）

でわこれからよろしいくお願いしますっ☆

ほっ、本物！？転生って良いなぁ～～～？

ん…？ここはどこだ？？たしかあのわけわからんおっさんにふっとばされて…
まず起きようかな…って、ええ！？
僕・・・女の子になってる！？てか何このかっこ！！
パジャマかわいい！！今僕が来てるパジャマかわいすぎだよ！！
ピンクのワンピース型のパジャマにうさ耳フードって！！！

「うわっ！！…あぁ…。こいつがユキか…」

うわぁぁぁ？本物だぁ！！僕そんなにヘタリア好きじゃなかったしイギリスなんてかなり興味なかったのになんか一瞬でそんなことが全部覆されたよ！！リアルイギイギかわいい～～～！！

「なぁ…一つ聞いていいか…？」
「は、はい。」

やっべ興奮とまんねっ！！

「お前は男だと聞いていたんだが…あとそのかっこなんだ？？」
「質問は一つじゃないんですか？」
「／／／うるさいバカ！！早く答えろ！！」
「なぜか起きたら女の子でこのかっこでした☆終わり。」
「まじめに答えやがれ…。」
「うわぁぁぁ！！ごめんなさい！すいません！でもこれ至って真面目なんです！！だからなんか変な技かけてくるのやめて！！」
いてて…。これならまずいといわれているスコーン投げられたほう

がましだよぉ…

「俺のスコーンはまずくないぞ馬鹿ぁ！！」

「なに勝手に人の心読んでるんですか！！プライバシーの侵害です！！」

「お前がでっかい独り言いってたんだろうがぁ！！」

やぁぁぁ！！もうやだ！！誰か助けて～～！！

「そ、そうだ！！アーサーさん？でいいですか？僕がお手伝いって言うのは知ってますよね？？」

「あぁ…。」

「な、何をすればいいですか？？」

「なにもしなくていいぞ。大体は自分でできるし…。」

「えぇ！？じゃあ僕ここにいる意味ないじゃん！！」

「じゃあその『僕』っていうのやめろ。いちおー今女だろ。」

「え～～じゃあなんて言えばいいですか？？」

「私…・とかか？？」

私…私…しっくりこない…

「却下☆」

「て、てめぇ！！人がせっかく一生懸命考えたのに！！」

「自分のこと名前呼びじゃ駄目ですか？？」

「勝手にしやがれ！！」

「じゃあ勝手にさせてもらいます☆」

ほかの国のとこ行きたい…。

「アーサーさん。ほかの国のとこ行きたいです。」

「あ、あぁ。いいぞ。今日会議あるからみんなに紹介しようと思ってたしな。いちいち聞かれんのとかめんどくさいだろ？」
「そうですね。知ってもらえるのは早いほうがいいですし…」
「じゃあ行くか…。」
「え！？もう行くの！？」
「あぁ。さっさとしろ。」

ふふ～～イタちゃんとかにも会えんのかなっ☆超楽しみなんだけど～～？

登場人物紹介的なもの！…うん♪ちがうね☆

「こ、こんにちわっ！！アーサーさんのとこでお世話になってる行きといいますです！よろしくおねぎゃいしゃます。」

うわぁ！！最後めっちゃ噛んじゃったぁ…。はずかしっ／／／

「よろしくね～～」

「ほなよろしくなぁ～～トマト食べる??」

「ご、ごほんっ。よ、よろしくな…。」

「ドイツは見た目怖いけどいいやつだから怖くないよぉ～～～☆」

「あ、はい…。」

うわぁぁぁ！！マナイタちゃん！！あ、違う！！生イタちゃん！！可愛いなぁ～～。あ～～でもフェリちゃんだよね…こっちでは…。親分もすっごいかわいいいいいい！！

ど、ど、ど、ドイツとかもめっちゃかわいい！！何これ！すげーすげーすげー

「ＨＡＨＡＨＡ！！俺がヒーローさ！！困った時はいつでも頼るんだぞっ☆まぁアーサーの家に住んでることは気にくわないけどなっ☆ご飯がすっごくまずいから気をつけるんだぞっ！！とくにスコーンはだめだ！絶対食べちゃだめだぞ！！」

「うるせぇよ馬鹿ぁ！！！」

「はは…。」

アル…・かわいい？天国??ぼく・・・違うや。ユキは悪いことしかしてないのに天国に来られるなんて・・！！神様ありがとう！！

「ぼくはイヴァンだよ☆よろしく☆」
「よ、よろしくお願いしますっ☆」
なんとか笑顔をを保ったけど…
ロシアこぇぇぇぇ！！いやだ！この人なんか生理的に無理ぃぃ！！
「かわいいお嬢さん…。お兄さんはフランシスっていうんだ。じゃあ行こうか！！」
「ど、ど、ど、どこにですか～～～！？」
ふわぁぁぁ！！この人も無理！！やだやだやだ！！やっぱ地獄だよ！！
「我は王ある！！気軽に話しかけるよろし！！」
あ～～中国さんだぁ？この人なら大丈夫だぁ？癒される…。
「お、おれはロヴィーノだコノヤロー。覚えとけよ…」
うん。めちゃかわいい！！萌え死～～～？
「私は本田菊と申します。趣味は空気を読んで言葉を慎むことです。どうぞよろしくお願いします。」
祖国～～～？塩塩塩塩～～
「私はローデリヒといいます。」
オーストリアさんだぁ？雰囲気が好きなんだよね～～～☆

「エリザベータです。」

可愛い？・・・てか何でみんな人名なんだよ！！国名でいいよ！！

「バッシュだ！！覚えとくのである！」

この人いっつも怒ってるから嫌いだぁ…。

「ふぇ、フェリクスだし～～。」

「僕はトーリスっていうんだ。よろしく。」

によによ↑

「俺はギルベルトだ！！まぁ、俺はかっこいいからもう覚えただろ？」

でたｗＺＡ☆不憫

「マシューだよ…。で、このクマさんが熊三郎さん…。」

クマ朗でしょｗｗ（（クマ二郎です。

「誰？」

「マシューだよ！」

「ＨＡＨＡＨＡいたのかい？マシュー」

「いたよ！！」

相変わらず影薄いなぁｗｗ

「ピーター・カークランドですよ！よろしくですよ！！」

あ～～そっかぁ。シー君はイギリスの弟だったよね…。

「以上だ…。そういえばお前ちゃんと名前とかいってないだろう？」

「あ！そうでした！！えっと、ユキ・カークランドといいます！！アーサーさんのお手伝いです！！ここには転生というもので来ました！元日本男児です！！よろしくお願いします！！」

あれ…？こいつ何言ってんだ的な目で見られたよ？？まぁいいか。気にしない気にしない☆

登場人物紹介的なもの！…うん♪ちがうね☆（後書き）

これ以外の人もでるかもです～～～

うあぁああ…。…楽園みたいやんなぁぁぁぁ？

「ねぇねぇユキちゃぁぁぁん！！」

あ、フェリちゃん？かわえぇぇ？

…うぶっ。いまお腹痛いんだった…。

「…？どうしたのユキちゃん。」

「あはははは。いまお腹痛いんだぁ…。」

「大丈夫？痛いの痛いのとんで行けー…。」

何このかわいい行動！！超可愛い超可愛い？治んないけど痛くなくなったような気がしないでもない！！

「ほんとに大丈夫？ルート呼ぶ？」

「あはははは…。大丈夫だよ～～。いててててて…。」

「うわぁぁぁ。ユキちゃん、死んじゃやだよぉ…。」

勝手に殺すな☆でもかわいいから許す！ハァハァ↑

「…あれ？なおった…。」

「ほんと！？嘘じゃない？？？」

「うん…。」

「よかったぁ…。」

かわいすぎる！ちがう意味でやばいかもぉぉ！！

「ほ、ほんとに大丈夫？息すっごい荒いよ？？」

「だ、大丈夫大丈夫…。」

「ほんとにホント？」
「うん。ほんとにホント。」
でもほんとなんで治ったんだろぉ…。やっぱフェリちゃんの可愛さのおかげかなぁ？？
「もしかしてさ。ユキちゃんがお腹痛いのって、アーサーの料理食べさせられた？？」
「いや…たぶん違うかな？？料理はユキも人のこと言えないけど、いちおーアーサーさんは作ってない…。」
うん♪最初はアーサーさん自分が料理作るって言ってたけどさすがにそれは僕が死にそうだったから…。
「うお、ユキ？こんなとこで何やってんだ？」
「あ、アーサーさん。フェリちゃんと話してただけですよ。」
「ふーんそうなのか…って、フェリの姿がどこにもないぞ？」
「あれ？さっきまでいたんですけどね…。ところで…・それなんですか？」
「あぁこれか？俺の新料理！ミラクルスコーンだ！！」
「ミラクルスコーン？」
何それ。いやな予感しかしない…。
「これはな、最初はバナナ味。次第にチョコ味へと変わっていって、その次はカレー味。で、最後にマンゴー味でｆｉｎａｌｅだ。」
うっ。考えただけで気持ち悪く…。
「ほら食ってみろ！！」

「あの、いまお腹痛いんで…」
「さっきフェリになおったって言ってただろ？」
聞いてたんかい！
「いえ、また痛くなってきたので…。」
「じゃあなおさらこれ食え！うますぎて痛いのなんか吹っ飛ぶぞ！！」
マズすぎて痛いのが吹っ飛ぶの間違いでわ？
「ほら遠慮すんなって。」
「や、やめてくださ・・。」
「ほら早く食えよ！！！」
何これ…。いじめ？
「ほら！早く！」
「らめぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」
こうしてユキの腹いたは悪化したのであった。

あはっ☆うん↑

ユキだよ～～
いままで更新できなかったのはアーサーのミラクルスコーンで病院送りになってたからさっ☆↑
嘘つくなって言われてもなぁぁあ…。
まぁ嘘なんだけど（（キラッ↑
うわぁぁぁぁごめんなさいぃぃぃ

「って、何やってんだ？僕。こんなとこで。」
ん～～なんか［ピーーー］ってなの人に嘘ついてぼこられてた気がするんだけど…
あ、夢か。夢ならしょうがない。
って、夢じゃない。
体中めちゃ痛い。動けないしw
・・・？ん？何これ…。
どぉしよ。
「アーサーさぁん！アーサーさぁん！！助けてぇぇぇ」
「なんだよユキ。どうしたんだっってうわっ！何だよそれぇぇぇ」
「あ、ちょっ逃げないでぇぇぇ」

「だって、それ、うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
「アーサーさぁぁぁぁぁん！！！！！！！」

「アーサー君♪ちょっとユキちゃん借りるねっ☆」

そう。僕の上にぁ血みどろの水道管を持って怖い顔をしたコルコル星人、いやすみません。怖い顔をしたいヴァンサンが座っていました。

…まさかそれでずっと僕のこと叩いてたわけじゃないよね？
僕の頭とかてからちが結構出てるんですけどw

「よいしょ。」

ひぃっ！持ち上げられたぁぁぁ

「やめてぇぇぇぇぇぇ！アーサー助けてぇぇぇぇぇ。うわぁぁぁぁ！」

「もう、うるさいなぁ。えいっ☆」

ごすっ☆

パタリ。

こうして僕の記憶は途切れた。

はっ！

＼（。ロ＼）ココハドコ？　（／ロ。）／アタシハダアレ？

・・・なんてやってる場合じゃない…。

痛い！痛すぎるよ！

何これ！

うわぁぁぁぁん！帰りたい！おかぁさぁぁぁぁぁん！

猫の馬鹿やろぉぉぉ！！

【ユキ　ハ　キョウフ　デ　ワレ　ヲ　ワスレテ　コンラン　シタ。】

ひっく。うっく。なんでこんなことになちゃったんだよぉぉぉ。

アーサー強いのに助けてくれなかった。

そりゃそーだよね。怖い顔で水道管持ってる人になんか逆らえないよね。しかも血だらけw

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁぁん。。誰かぁぁぁぁぁッぁぁぁぁぁ。びえぇぇぇぇぇッぇぇぇぇぇん」

「ふわっ！？ユキちゃん！？どうしたのっ！？」

「帰してぇぇぇぇぇ。おねがいしますぅぅぅ。何でもするからぁぁぁぁぁ」

「大丈夫。もうちょっとで帰すからねっ☆コルっ☆」

「…なにしようとしてるの？」

「ん～～。アーサーに仕返し？」

それだけかぁぁぁい！
アーサーのせいで僕巻き込まれちゃったのぉぉぉ！？
家帰ったらこっちはこっちで仕返ししてやる！

「でもなんでボ・・・ユキを殴ったりしてたの？」
「え？ユキちゃんが傷ついたほうが盛り上がるじゃない。」

それだけかぁぁぁ。それだけの理由で！
盛り上がらなくてもいいよ！

「あ、来たみたいだね。」

ふぇ？

「ユキ！！！」
「アーサー！」

うんうん。感動のシーンだね↑

じゃ、つづく

アーサー、ユキを助ける、の巻↑（前書き）

前回の続きですお～～

アーサー、ユキを助ける、の巻↑

「アーサーさぁん！！」

やっと来た！アーサー来てくれた！

助けに来たんだよね？

ちがったらぶっ殺しちゃうかもな☆

でも、助けるんじゃなかったらここには来ないよね？

うん。そう信じよう。

とか思ってるうちにアーサーはイヴァンサンにやられていた。

「え！？えぇぇぇぇぇ！？早い！やられるのが早いよ！アーサーさぁん！」

「ぐッ！なかなかやるな…。ユキ、ごめんな…。」

「ごめんな」じゃないよぉぉぉ！

何あっさりとやられてるんだよぉぉぉ！

ぐすん…。もう僕はここで終わりなんだ。

あ！アーサーさんにこれを言ったらきっと目覚めるな！

僕が攻撃されそうだけど…。

「あーぁ。アーサーさんったら弱いなぁ。まぁいいや。アーサーさんのごはんおいしくないし。イヴァンさんアーサーをやっつけてくれてありがとう！」

「んだと、ユキ…。」

やったぁ！起きたぁぁぁ☆

怒ってるけどそれは気にしない方向で↑

ドカッ！

「もう。アーサー君はうるさいなぁ。ユキちゃんがう素直にお礼してるんだあkら僕もそれを受取らないとね☆」

ガクッ…

［アーサー　ハ　ヒンシ　ノ　ジョウタイ　ニ　ナッタ］

うあぁぁぁぁぁ！

逆効果だったぁぁぁ！？

アーサーさらに叩かれて完全に気絶以上のものになってるし

イヴァンさんは僕を奪う気満々になっちゃってるよぉぉ！！

最初アーサーへの復讐だったのにいつの間にか僕を奪う方向になってるよぉぉ！！

なんで水道管を素振りしてるの？僕に水道管についた血が飛んで来てるよ！

「ごめんなさいごめんなさい。嘘です。アーサー起きてぇ！僕やられちゃうよぉ！僕あーさがいなくなったらどこすめばいいの？アーサーのまずいスコーンだって食べるよ！だから帰ってきてぇ！」

「まずいは余計だ、バカ…。」

起きた！今度こそ！？

イヴァンさんがまた水道管ふりあげてるよ！

やめてぇぇぇぇ！！

カキンッ！

・・・・？

「へっ、見え見えだ。馬鹿。」

「あれ？アーサー君はさっきまで僕にやられてたのにいきなり強くなっちゃった？」

「俺はもともとつぇぇんだよ。」

アーサー！！かっこいい！

「まぁいいや。僕もそんなにユキちゃんがほしかったわけでもないし、返すよ。アーサー君。また遊ぼうね♪」
「やだよ」

こうして僕はアーサーに助けてもらったのだ！

でめたしでめたし

「ちょっとぉぉぉ！でめたしじゃないよ！頭殴られたりした傷全治三週間！最悪だよぉぉ！」

しらね＾ｐ＾↑

アーサー、ユキを助ける、の巻↑（後書き）

ユキが途中一人称僕になったのは混乱によるためです。
作者が間違えたのを直すのがめんどくさかった、そういうわけではないんです。↑

迷子のユキたん↑

今日は平和だな～
だからお散歩しよう。

しらない道も通っちゃうもんね～☆

あはははは。ルートさんとフェリちゃんが
追いかけっこしてるよ～
また訓練抜けだしたのかな？

てかなんでイギリスで訓練しちゃってるの？
勝手に人の国で…って…

ここイギリスじゃないぃぃぃ！？

イタリアじゃぁん！！

え、嘘だぁ！
迷った！？

って言うか…

ちがう国に来ちゃった！？

ヤバいよ！
僕パスポートとかもってないよ！？
どうしようどうしよう！
そうだ！ルートさんに助けてもらおう！
「ルートさぁぁぁん！」
あ、フェリちゃん捕まった。
「お、おお。ユキか？なんでこんなところにいるんだ？」
「いえ、それが…。」
「ヴぇ～ユキちゃんだぁ～一緒に遊ぼうよ～」
「お前はまだ訓練中だろ！」
「ヴェ～もうやめよーよ、ルートぉ」
「だめだ。…で？ユキはどうしてここに来たんだ？」
「いえ、それが…お散歩してたらまよっちゃったぁ☆」
「そうか…。まぁ、またずいぶんと歩いたもんだな…。」
「かなり疲れたであります！」
「フェリの真似はしなくてもいい。」
しゅーん（，・ω・、）これ、僕の素なのになぁ…
「まぁとにかく。アーサーとこまで送ってやるからついてこい。」
「はーい。って、またユキ歩かなきゃいけないのぉぉぉ？」
「ああ。あるけ。」
「えぇ～やだ～歩きたくない～疲れたぁ～」
「いいからさっさとこい。」
「アーサー呼んで車で帰る～」

「だめだ。あいつをイタリアへは来させん。」
「なんで～アーサーいいやつだよ～？飯まずいけど。」
「それがだめなんだ。イタリアをまずい飯でいっぱいにされてはかなわん」
「そんなことするかなぁ。」
「あいつならしそうだ。」

ふ～ん？アーサー嫌われ者なんだなぁ。
さすがに僕を迎えに来るのにまずい飯を持ってこないと思うんだぁ～
まぁ、本気で怒ったらやりかねないかもね～w

「ほら、ついたぞ。」
「ふぇ？あ、ほんとだ～」
「じゃあな。」
「ルートさんおくってくれてありがとう～」
「ああ。アーサーによろしく頼むぞ。」
「うぃ！」
「…返事ははいだ。」
「はいであります～」
「敬礼…するのは良いが手間違えるな…。つくづくお前とフェリアシーノは似てるな。」
「そーですかー？」
「あぁ。じゃあな。」
「じゃあね～」

フェリちゃんに似てるだってぇ～
最上級のほめ言葉だよ～
僕にとっては。

迷子のユキたん↑（後書き）

皆さん！
一つ言っておきます！
ユキが女になってるってこと、忘れないでくださいね…？
作者は今思い出しました↑おぃ

ハロウィーン♪（前書き）

一日遅れましたが…。
ハロウィンネタです！

ハロウィーン♪

「アーサー♪トリックオアトリーロォ！」

ありゃ、噛んじゃった…。

「あ、そうか。ハロウィンか…。って一日遅くねぇか？」

「いいから～おやつ～」

「あぁ。スコーンでいいか？」

駄目にきまってます。

「なんだと？」

「あるぇ？声に出したつもりはなかったんだけど」

「ばっちり出てたぞ？」

「じゃあいいや。パンプキンパイ食べた～い！買ってきて！」

「そんぐらい作ってやｒ「買ってきて！！！」…ああ」

やったぁ♪パンプキンパイ～☆

あ、帰ってきたときのアーサーのためにいたずらしかけちゃお～っと☆

―――――ユキトラップ仕掛け中―――――

「よしできた！！！」

ガサガサ

「あ。ちょぉど帰ってきたぁ！」
「やぁ、あーーーーーーー」
ガラガラドッしゃぁぁぁん！
「アルフレッドさぁん！？」
「ちょっ！何だいこれ！ＨＥＲＯをこんなとこに落とすなんて全く悪趣味だなぁ！」
「なんでアルフレッドさんがかかるんですかぁ！」
「あ、ユキちゃん！出してくれよ～。誰かがこの俺様を罠にかけたんだ～」
「すいません…。それやったのユキです。」
「えぇ！？キミがかい！？」
「は、はい…。アーサーを罠にかけてやろうかと思って…」
「なんだいそれ！いいアイディアじゃないか！」
アルフレッドさんの目が眩しいよ…。
「あ、でもアーサーこれに落ちたらパイが台無しになるとこだった…。」
「え…。もしかして君アーサーにパイを頼んでるのかい？」
「はい？そうですけど。」
「やめといたほうがいいよぉぉぉぉ！！アーサーの作ったものは食べないほうがいいんだぞ！」
「あ、大丈夫です。市販のものです。」
「それなら心配ないんだぞ☆」
アルフレッドさんひどいなぁ。もっともなんだけどさ。
「アルフレッドさんもパイ食べてってください。」

「ほんとかい！？ユキちゃんはやさしいねぇ！アーサーとは大違いだ！」
「おい。いまなんつった？」
ひぃぃ！アーサー帰って来ちゃったぁぁ
「え？居たのかい？アーサー。」
「てか何でお前がここにいるんだよ！」
「えっと…。それは俺がヒーローだからさ☆」
「あぁ…。もういい。お前には俺様特製パイをごちそうしてやるからな（（により」
「い、いじめはいけないんだぞ！た、助けてくれよユキちゃぁぁぁん！！」
「お大事に～～」
うん。ほんとお大事に↑
「あ、アーサー！パンプキンパイユキの分はぁ～～？」
「いたずらしようとしてただろ。駄目だ。」
なんで知ってんのぉぉぉ？
「ええ～～～？アーサーひどいよぉぉぉぉ！！パンプキンパイ～～～！」
「俺特製パイならいくらでも…（（によによ」
「やだぁ～！」
「ふふっ。ユキちゃん。ヒーローがいるから大丈夫さ☆」
「パンプキンパイ～～」
うぅっ！パンプキンパイ食べたいよぉ。アーサー特製パイなんて絶

対にいやだぁぁぁ」

「心の声ダダ漏れだぞ。」

「うえぇぇぇぇん」

トリックオアトリート！

だれか僕をアーサーから救ってぇ！

そしてパンプキンパイっ食べさせてぇぇぇ！

じゃなきゃいたずらしちゃうぞぉ～～～！！

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい～～！」

アーサー特製パイ…。

まずい…よ…・ぅ・・・・・

がくっ；；；；

風邪引いたぁ～ですよ☆↑

「ほんとに大丈夫か？」
「大丈夫だって…」

どうやら僕は風邪をひいてしまったようで…。
熱が４０度近くあるんだ…

だるいよぅ…。

頭痛い…。

「お粥作ってやろうか？」
「結構です。」
「遠慮すんなって。」

いやぁぁぁぁぁ！
遠慮なんてしてないよぉぉ！

「だ、大丈夫だよアーサー！家事とかいっつも僕やってたからアーサーとはたぶんやり方違ったから逆になんもしないほうがいいかも！」
「いいから。大丈夫だ、寝てろ。」

大丈夫じゃないよぉぉ！
すっごく心配！とくに料理ｇ（（ゲフンゲフン

おっと、咳が止まらないなぁ↑

「ほら、咳してんじゃねぇか。早く寝ろ。」
「うう…。間違っても料理作んないでね。」
「うるせぇ、寝ろ。」

びょ、病人にうるせぇって言ったよこの人！
ひどい！！
もう、ふて寝してやるぅぅぅぅ↑

「じゃ、早く寝ろよ（ニコ」

な、なんですか今の笑顔…。
「にこ」って言ったよ「にこ」って！

え？あれデレてきな？
てかやべぇ興奮とまんねぇぇぇ↑

「おい」
「はい？どしたのアーサー」
「もぞもぞ動いてないでほんとに早く寝ろよ？」

もぞもぞさせてるのはアーサーのせいだよぉ！

「わかったか？」
「は～い…」

はぅ…眠いかな？
おやすみ…？

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「ほうわっ！」
「わっ！なんだよ…いきなり奇声あげておきやがって…。具合は大丈夫か？」
「え？あ～…うん。もう大丈夫っぽいよ☆」
「そっか、よかった。でも今日一日は寝てろよ？」
「うん。」

でもほんと気分良くなったな～？
なんで？
寝てただけだし…。

僕もともと風邪とかひかないしな～。
健康だからかぁ☆★☆

「って、あれ？アーサーもしかしてさ、ユキのことずっと診ててくれた？」
「なっ、馬鹿！別にお前のためじゃなく…。俺にうつったら困るからなんだからな！」

ツン？ツンですねわかります↑

「お前今…なんか変なこと思ってるだろ…。」
「別に？思ってないよ～？」

ん～…。こっちの世界来てからなんかこ―いうこと思うの多くなったなぁ…w

「ほ、ほんとにお前のことなんて心配してなかｔ（（ｒｙ」
「はいはい。わかりました。」
「お前…信じてないだろ…／／／」
「ん～？信じてるよ？」
「嘘つけ馬鹿ぁ！」

あ～アーサーかわいw

でも今回はホントにありがとっ☆アーサー。

風邪引いたぁ～ですよ☆↑（後書き）

終わり方微妙だぁ～～

ほんとはアーサーの料理食べてさらに体調悪くするユキを書きたかったんですが…。

めんどくさくなっちゃって↑

ぐすん…。イヴァンさん怖いよ・・・

「ん～～～！！いい気持ちだなぁ～～～！」

こんなに朝から気分がいいなんてっ！

どうしたんだろう！

こんな日に限っていやなことが起こるわけ～～～・・・・

「みーつけた☆」

起こりました。

こんな日だからこそ、起こったんでしょうか。

気が抜けてる日こそいやなことが起こりやすい。

教訓でしょうか。

「イ・・・イヴァンさん・・・こ、こんにちは…。」

笑いが引きつったかも…。

「えっと・・・あの・・・何を見つけたんですか？」
「もちろんユキちゃんだよ。コルっ☆」
えぇぇぇぇぇ！？意味わかんない！
何この人怖い！

「ユキなんか見つけてどうするんですかぁ～…。」
「もちろん拉致だよ。それ以外なにがあるのさ。」
ひ、ひいやぁぁぁぁぁぁ！拉致？今拉致って言った？
「じょ、冗談ですよね～☆まったくもうイヴァンさんったら～…」
怖い怖い怖い怖い怖い
逃げるべき！？
うん、逃げよ…はうぁっ！
「どこ行くの？逃げるなんて許さないよ？」
「ど、どこにも行きませんよ～…。だから離して・・・」
「離すなんてサービス僕にはないよ☆」
怖いぃぃぃ！
アーサー助けてぇ！
「アーサー！！怖いよ！助けてアーサー！」

「何騒いでるの？アーサー君なら今嘘の打ち合わせに呼び出されてるはずだよ？」

なんでそんなものに行ってるのぉぉぉ！？

「今頃きっと閉じ込められてるかな★」

笑顔で怖いこと言ってるぅぅぅ！

「あ、あの・・・今回はどうしてユキを拉致…？」

「それは・・なんとなくだよ。」

なんとなくで拉致！？

怖すぎるよぉぉ！！

「ユキを拉致してどうするつもりですか…？」

「ん～…。それはあとで教えてあげるから楽しみにしてて☆」

楽しみに！？

できない！

できそうにない！

・・・こうなったら！

「あの・・・なんでも言うこと聞くから・・・許して・・・。」

これ言ったら話してくれる気がする～～～～！

するだけだけど！↑

「うん。じゃあ言うこと聞いてね？」
「はい。」
「僕に拉致されて☆」
「いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

そう来るか！
この人頭の回転速いぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃ！！
「あれ？なんでも言うこと聞くって言ったの君だよね？じゃあ守んなきゃ。」

・・・アーサー。
今までありがとう。

きっと僕は・・・
二度目の死を迎えることでしょう・・・。

さようなら。

後、最後の頼みね？

助けて！ｈｅｌｐｍｅ！！！！！！

やっぱり死にたくないよ！

イヴァンさんなんかさっきより怖い顔になってる！

だれかぁぁぁぁぁぁぁ！！

「…えっと〜〜…これはなにプレイ？」

え？誰か来た！

ぐすん…。イヴァンさん怖いよ・・・（後書き）

だれだか分りますよねｗｗ
ヒントは変態です↑

続く！と思う・・・↑

お兄さんキター↑（前書き）

ロシアのキャラが違うって言われたよ～

うん。なんかロシアってキャラ微妙なんだ。僕の中で↑

ちょっと違うとこあるかもだけどそこは勘弁！

お兄さんキター↑

「え～・・・っと。これはなにプレイ…？」

うあぁぁ！危険人物増えたぁ！

えと～…もうわかりますよね！？

あの髭で変態で変態で変態で髭の人です！

「ちょっとユキちゃん！？お兄さんのこと悪く考えたでしょ！助けてあげようと思ったけどやめた！」

「助けっ、って・・・・えぇぇぇぇぇぇ！？ほんとに！？ほんと！？」

「さっき思ってたこと撤回したらかわいいユキちゃんを助けちゃおうかな？」

「うん！撤回する！」

「わかったよ。いま助けてあげるよ。」

やったぁぁぁ☆

あれ？でも…。

「待って？フランシスさん。確かあなた…弱いですよね？」

「し、失礼だな！そんなこと言うとほんとに助けないよ！？」

いや、助けるもなにも・・・

「あなたが口出すと火に油注いでるだけの気がするんです・・・」

だって戦って勝つなら良いよ！？

けど負けたらさ、イヴァンさんの怒りが増すだけだと思うんだ！

そしてフランシスさんには勝ち目がないとおもんだ！

「大丈夫大丈夫。お兄さん、今日は秘密兵器持ってきたから☆」

「え？秘密兵器って…？」

核爆弾？

いやいや、危ないよね☆

さすがにないかw

えっと～…なんだろう。

「秘密兵器って何持ってきたんですか？」
「エロ本☆」
駄目だこの人＾ｐ＾
「それがなんの役に立つんですか。」
「エロ本を差し出されて夢中にならない男はいないと思うんだよね〜お兄さん。」
・・・イヴァンさんから重たい空気が伝わってくる。
「健全な中学生の前でそんなもの出さないでください。」
僕一応生前男の子だからね。
そして中学生だったからね。

まぁ生憎エロ本にはあんまり興味もてなかったけど←
「しかもユキは女の子なんですよ？」
「あはは、ごめんね。でもユキちゃん。アーサーの家掃除してたらこう言うのいっぱい出てくるんじゃない？」
ザッツライト！
そのとうり！
確かに掃除してると出てきます。

そのたびに僕はアーサーにお説教するのです。

『ユキが掃除やるって言いだしたけどエロ本くらい自分でしまっといてよ！』

ってねw

あの人意外と懲りずにエロ本みつけられてるんだw

「で？ユキちゃん。助けたほうがいい？」

「うん。助けてほしい。けどフランシスさんじゃ無理な気がするのでなんか違う人呼んでもらってもいいですか？」

てか今きずいたけど・・・

フランシスさん来てから僕なんか冷静になってる…？

「なんかユキちゃんお兄さんの扱いひどくない！？」

ん～…。

めんどくさいなぁ…。

あ、でも逆にこの状況はあそべるかも！？

ぶりっこモードオン☆↑

「え～？そんなことないよぉ～？」

「え、ユキちゃんいきなりどうしたの・・・。」

お兄さんキター↑（後書き）

ユキちゃんはあえて遊ぶことにしたようです↑

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4987v/

あれ？あはは。転生しちゃった☆

2011年12月18日00時47分発行